



花嫁人形

佐々木丸美

〔著者〕佐々木丸美 昭和24年、北海道当別に生まれる。道立当別高校卒。
北海学園大学中退。昭和50年、長編小説「雪の断章」でデビュー。以来、
札幌郊外に腰を据え、ファンタジー、ミステリー・ロマンなど、独特のリ
リカルなムードをもった作品を数多く発表している。主な作品はほかに
「崖の館」「忘れな草」「恋愛今昔物語」「罪灯」「榛家の伝説」などがある。

はなよめ にんぎょう
花嫁人形

さ さ き まる み
佐々木丸美

© Marumi Sasaki 1987

1987年5月15日第1刷発行

1989年2月25日第5刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-183980-2 (0)

花嫁人形

花嫁人形

昭菜と名づけられた私。

本岡家で生きるにはその名はあまりにも重すぎた。よじれた運命の荷車は哀しき禁断の愛を引いてコトコト進む。遙かな幸の灯火をめざし私はひとり雪道をさすらう。

父は北一商事代表取締役。温厚で子煩悩で社会的信望のあつい人格者だった。母は美しく従順で、父への信頼を人生の床石として生きてきた人だ。四人の姉妹は父母の愛の揺りかごで何不由なく育ってきた。幸福に満ちた家族の中で私ひとり異端児だった。父も母もかならず「四人も娘がいて」と人に語り、姉たちも「四人姉妹です」と人に答えた。私は家族の数に入っていなかった。

母の実弟が同居していた。大学生になった時に越してきた。姉妹たちのよろこびようは大変なものだった。いきなり兄さんができるようなものだ。大騒ぎの果てに部屋の調度品や食卓の席順が決まった。父母の意見もかんじんの叔父の意志も無視して万端ととのえられた。私も秘かに心

を躍らせた。孤立した家族の中で叔父だけは時々優しい微笑をくれたから。決まってそばに誰もいないときだった。それは自分の身の上に照し合わせてみると意味ある暗号のようだった。

兄のように若い叔父を慕う姉妹たち、ものかげで息をひそめてそれをながめる私。平和な本岡家に小さなさざ波がたつたのはこのときからだ。幼い想いは幼い波をつくり、想いの成長とともに波も大きくなった。ひとつふたつと波紋は広がり、やがて荒れ狂う心の海と化したのだ。

叔父は末っ子の織ちゃんを一番愛した。いつも肩車にのせて庭を散歩し絵本を読んできかせた。織ちゃんも父や母よりも叔父がよくて、食卓の席も隣、部屋も隣、何でもかでもそばにびったりいなければおさまらなかった。「大きくなったらおじさんのお嫁さんになるの」と言ってみんなを笑わせた。無邪気で健康で思わず顔がほころぶほど愛らしい。両親の愛も姉の愛も叔父の愛もおよそすべての幸福を一身に集めていた。同年でありながら彼女が光ならば私は影、ひっそりとながめては「いいな、織ちゃんは」とつぶやくだけ。

織ちゃんに宿敵がいた。いとこの奈津子さんだ。同年なのにかなり大人びて口も腕力もかわない。叔父が同居するようになるとひっきりなしに遊びに来た。おじさんおじさんとべったり糊のように張りついた。織ちゃんが妬けば尚さらからみついた。「織ちゃんなんかどんなに大きくなってもおじさんと結婚できないのよ、わたしは血がつながっていないから結婚できるの。おじさんのお嫁さんは私になるのよ」と言っただけ泣かせたことがあった。以来織ちゃんは異常なほど叔父から離れなくなった。お嫁さんになるという響き、それは多分大好きな人の最終的独

占権をもつものなのだろう、二人の争いを見るたびに私も揺れていた。

長女の藍ちゃんあゐは奈津子さんとおじさんと結婚すると言った時に首をかしげる。誰にそんな智恵をつけられたのかしらと。母を助けて家政をとりしきるしっかり者、奈津子さんの姉の聖子さんと時々口論するけれどかならず負かしてしまう。仲よしのいとこ同士でも叔父のことになると角つうが出る。

次女の郁ちゃんいづみはその点大らかだった。子供の言うことに姉が口ばしを入れることもないわと笑う。姉妹の中では一番美しくおとなしい人だった。そして叔父に勉強をみてもらうのも相談するの一番多かった。父や母よりも叔父を頼っていたようだ。私は姉たちの中で郁ちゃんが好きだった。

三女の詩ちゃんうたは姉たちと全く異り、何もかも口に出す人だった。聖子さんと全くつり合いのとれた喧嘩相手けんかだった。

「冗談じゃないわよ奈津ちゃん、あなたみたいなおチビちゃんにおじさんを横取りされてたまるものですか。血がつながってないから結婚できるなんて誰に智恵をつけられたの!? 聖子さん、あなたに断っておくわ。おじさんはこの家を継ぐのよ、将来はお父さんに代わって会社を経営していくのよ」

「彼を一人占めさせないわよ、本岡一族のたった一人の大黒柱なんですからね。大学だって本当は私の家の方が近いのに無理矢理こっちに住まわせてしまって、お父さん怒ってたわ、何でも勝手に決めてしまうって」

人が争うときそこにはかならず何かへの愛がある。何かを守るために主張し激怒する。私には守るべき何ものもない。家族としての価値も人生の価値もわからない。まして本岡家の娘としての価値も叔父を慕う姪としての価値もわからない。私にはそれらを考える基準さえもわからないのだ。わかつているのはただ六歳という年齢と昭菜という名前だけ。

私は家族と口を聞いてもらえなかった。

哀しみの形はたくさんあるけれど完全な無視状態に置かれるほど哀れなことはない。

もの心ついたときはすでに無言の金網で仕切られていた。病弱なため部屋にこもり寝たり起きたりの日も続いた。具合が悪いのかと聞いてくれる者もなく、いつしか私は家族とはこういうものなのだと思った。多分私は本岡家の人間ではないのだろう。その上に青白い顔の病人ときては嫌われて当然、さらに私は学校に行かなかった。母は好きなようにしなさいと言っただけ。「昭菜は体が弱いから」と何もかもこの一言でかたづけられた。いじめられることはなかったけれど淋しかった。学校に行かないからといって読み書きを教えるわけでもない。大人の庇護を受けない子供がどれほど誤った人生を歩むのかをあとになってつくづく考えたものだった。食事をしていても居間でくつろいでいても、両親と姉妹は楽しそうに語り私は独りで聞くばかり。こっちら話しかけると短い答えだけでまた無視される。いつとは知らずみんなの輪から外れて一人で遊ぶようになった。しかし家族を恨むつもりはなかった。私を無視するだけであって他はこの上もなくいい両親と姉たちだった。それだから尚、言うに言えない哀しみが渦巻いていた。

奈津子さんは私に言いたい放題を言ってきた。事あるごとに「字も読めないくせに」とののしった。両親も姉たちも何も言わないのになぜ彼女が辛く当たるのかわからなかった。しかし奈津子さんの投げつける誹謗ひぼうによって初めて字も読めない愚かさを計ることができた。食事をしていると「字も読めないくせにお腹が空くのは一人前ね」と言う。お菓子を分けてもらうと「計算もできないくせに目が光ってる、すごいねえ」と言う。返す言葉もなく戸惑った。そしてそんな奈津子さんを咎とがめることもしない父と母にもっと戸惑った。何も言わないのがどれほどむごいことか思い知らされた。

クリスマス・イブの贈り物が次々と渡されていく。みんな私の目の前を通りすぎた。聖子さんが「コソコソ盗み見たってプレゼントなんかないのよ」と笑った。叔父が織ちゃんおきなと奈津子さんに本を贈った。

「きれいな絵ね。どうもありがとう。おじさん、これ何という字？」

「ミ、だ」

「ロミオとジュリエット？ 全部読めたでしょう？ そうじゃないかと思ったわ、だってこの間お話してくれた物語に似てる。字を読む前にわかったわ」

「絵本というくらいだからな」

「じゃあきなにもわかる？」

みんな笑った。聖子さんが「気にしているらしいわよあれでも。無学の者ほど敏感だって言うじゃないの、試しにその絵本を見せたらいいわ、絵だけで物語がわかるかどうか」と言うともた

みんな笑った。私は立ち上がった。目まいがした。笑われたせいなのか父たちが聖子さんを肯定しているせいなのか。歩いたのか走ったのか、気がついたら暗い部屋にぼつりと座っていた。叔父の笑い声だけがいつまでもこだました。字を知らない自分が悪いのだ。恨みはしないけれどもこのままでいいはずはない。誰も教えてくれないなら自分で学ばなくてはならない。窓にはこな雪が降っていた。はらはらとぶつかっては闇に消えてゆく、名もない痛みを乗せた無学の小舟は雪の闇へとすべり出した。あたかも吹雪の海に白い教科書が綴られているかのように。胸の痛みが教師、孤独が筆。昭菜^{あきな}よ学べ、誰も教えぬ人の世の悲哀を。学問は心の絵文字、まず心を起こせ、涙の火種を見よ。カサカサと鳴る雪はそうささやいた。

叔父はみんなの前では冷たい人だった。誰もいなければ優しくかった。二つの心をもつ叔父がわからなかった。少なくとも六歳の智恵では理解できなかった。私がもう少し明るい性格なら、おじさん私も勉強したい、と言えただろうに。

廊下の高い窓が何やら光っていた。

よく晴れた凍^{しも}れた日には決まって見える。両手に息を吐いてあたためながら見つめていた。するとむこうから叔父が歩いてきた。まだ外出していなかったの？ セーター姿でコートを片手に持っている。

「何を見ていたの？」

「お花」

叔父は窓を見た。微笑を浮かべて頷いた。

「結晶のことか？」

「けっしょう？」

私を抱きあげてすぐ近くで見せてくれた。

「きれいだね」

「うん」

「雪の花は寒い日にだけ咲くんだよ」

大きくてあたたかい掌がかじかんだ指をつつんだ。そしてその指を花の一つに押し当てた。ガラスはナイフのように冷たくて切れそうだった。

「なくなった」

「あたたかくすると枯れてしまうんだよ」

ちがう。おじさんの手の中に入ってしまったのよ。心の中で言った。すると叔父は「またすぐ咲くよ、今度は昭菜の心の中に」と言った。こんなにきらきら光るお花が？ 思わず笑った。叔父も笑った。腕から私を降ろすと時計を見た。片手をあげて「行ってくるよ」と言った。織ちゃんに言うように優しい声。雪の花という言葉は二人だけの秘密。溶けて消えた花はおじさんの手の中に、昭菜の心に。二つの暗号は孤独の海が枯れるほどの幸福だった。

年が明けると織ちゃんはカルタに熱中した。座敷の真ん中で同じ絵カルタをくりかえす。何度

やっても織ちゃんが一番早い。絵を見て取っているからだ。そこへ叔父が新しいカルタを買ってきた。「もう一年生だぞ、字を読んで取りなさい」と。織ちゃんはたちまち熱中した。わずかの間に完全に字を覚え詩ちゃんたちと同じくらい早く読めるようになった。今までは一字ずつたどたどしく読んでいたのに。それを知った父はたいそう誉めてまた新しいカルタを与えた。今度は易しい漢字まじりだった。これも叔父がくりかえし相手をしてとうとう全部覚えてしまった。みんなに誉められて得意になった。

「奈津ちゃんよりえらい？　ねえ、おじさんてば」

「また始まった」

「奈津ちゃんと私どっちが好き？」

「織が好きさ」

「大きくなったら結婚する？」

「いいよ」

ひざをよじのぼって甘える。父も母も目を細めて見守った。一日一度はおじさんと結婚する口にする。うっかり駄目だと答えようものならたちまち大粒の涙をこぼし、「奈津ちゃんが好きなね」と泣きじやくる。どんなに風が吹いても吹雪いても織ちゃんは学校へ行った。いやだと言っても父が赦さない。叔父も叱る。甘ったれ織ちゃんがそんなにしてまで行かされる学校なら私も行くべきではないだろうか？　病気がちで行きたくないと言えばあつまりり行かなくてもいいと答えた母をふりかえる。しかしそこに答えはない。昭菜、学校へ行かなければだめだよとは誰

も言わない。そこにも答えはない。それだからといってこの現状にも答えはない。

私は毎日織ちゃんのカルタ遊びを障子のかげで見っていた。叔父はくりかえし「読みあげるはじめの言葉の字が書いてあるんだよ、きれいな花だからこれは、きという字だ」と教えた。「わかっているってば」と口をとがらせた。しかし叔父はしつこいほど読み言葉と絵の文字をくりかえした。やがて織ちゃんはカルタに飽きた。惜しげもなく折ったり傷つけたりした。

カルタ遊びをしなくなると私も座敷へは行かなくなった。ある日私の部屋の近くのチリバケツに箱ごと捨ててあった。びっくりして中をのぞいた。箱から一、二枚はみ出している。まわりに誰もいないのを確かめてから手にとった。犬の絵だ。折れている角をのばすと犬の耳もぴんと立ったようだ。うれしくて笑った。わたしのかわいいシロ、とおじさんが読みあげていた。次は？ 花だ。チューリップに目がついてはっちりとこっちを見ている。一枚、二枚と拾いあげついに箱ごと持ち上げた。スカートにかくして廊下を走った。私に玩具はなかった。欲しいと言うと、ぼつりとそれだけ与えられた。カルタも私がそばでうらやましそうにながめていても仲間に入れてくれることはなかったし、これが昭菜のだよと与えられることもない。部屋で床に座ってバラバラとまいた。向い側にクッションを二つ並べた。これがおじさん、こっちが郁ちゃん、三人で始める幻のカルタ会、私はにこにこ笑っていた。

淋しい心のまま桜が咲き枯葉が舞いこな雪が降る。九歳の目に映るのは孤独の色ばかり。

織ちゃんおりちゃんは小学三年生。詩ちゃんうたちゃんは中学生に、郁ちゃんいぐちゃんと藍ちゃんあいちゃん高校生に。叔父は就職試験を考える頃になった。

日々はとりとめもなく流れた。

冬の陽だまりで母が編物をしている。ベランダの揺り椅子にゆったりと身を沈めながら。そばで柱にもたれて見ている叔父。ジーンズのポケットに両手を入れて少しまぶしそうに、かちりと光る編棒をながめている。

「姉さん、昭菜のこともう少し気を配ってやれよ。あのままではいじけてしまう」

母は黙っていた。針に糸をかけるたびに肩が少し動く。叔父の声は沙漠の雨のように私にしみ通った。

「うっかりしていると飯も食べてない日がある。服や玩具はともかく腹を空かせるのは可哀想だ。誰にも何も言えない疎外感をつくったのは姉さんの責任だぞ」

「放っておいても育ちますよ、昭菜はそういう子です」

「他人の娘は愛せないか」

「そんなわけではありませんよ。ただあの子が昭菜だから何もかもが大儀なの。五人いた娘が一人欠けて、その穴埋めのようにひよっこりやってきた子だからといって愛せるものではないし。壮嗣つよしも親になればわかるわ」

北の空から雲が流れてきた。母の手もとをうす暗くつつんだ。私は廊下を戻った。放っておいても育つ子と言った。他人の娘は愛せないかと言った。ほんの小さなさざ波が立っただけ。私は

やはり本岡家の娘ではない。父や母の私への扱いは正しい、両親を逆恨みしてはならない。私もまたこの家の人々に干渉してはならない、無視されるなら私も相手を無視すべきだ。決して恨みつらみではなくそれが唯一の哀しみからの逃避手段なのだ。姉妹たちとの摩擦を斬って捨てるには無視相殺の構えしかない。母の気だるい声の中に黒々と罅を巻く人生の潮を直感した。あたたかい炎を秘める叔父の声に遙かな愛の灯台が見えた。

体調は一進一退。微熱がつづいた。ベッドから離れられず食事にもお風呂にも行かなかった。白い紙に字の真似を書いて遊んだ。おじさん、あきな、の言葉をまっ黒くなるまで書きつぶした。字を覚えるにはどうしたらいいのかしらとぼんやり考えたり、このまま部屋から出て行かなければ死ぬまで誰も見に来てくれないのかしらと思ったり、本当に死んでしまえば父や母はどんな顔をするかなどと想像しては笑った。どこに残る親への甘え、かすかに匂う母のやさしさ、理性だけで斬り捨てるには幼なすぎた。二日目の夕方に郁ちゃんが入ってきた。熱を計り熱いミルクを飲ませてくれた。ご飯は食べられなかった。「お医者さんへ行こうか？」とのぞきこんだ。きっぱりと首を振った。

「注射がこわい？」

「うん」

優しく笑って頭を撫でた。わずか一瞬の姉の姿。ドアの外へ出るとたちまち冷たい姉妹の群に混る。母と同じように姉たちも何か理由があつてこうしているのだろう。